

〈特別活動〉

よりよい人間関係を築こうとする態度を育てる学級活動の工夫 — 社会性の基礎を身につけるための活動を取り入れて（第1・2学年） —

石垣市立崎枝小学校教諭 前 泊 睦 美

I テーマ設定の理由

近年、少子高齢化、情報化、ネット社会等の影響により人間関係の希薄化が進み、子どもたちがこれまで家庭や地域の中で自然に習得してきた人と人との関わり方や社会のルール等の社会性を身につける機会が減少している。また、便利で効率の良い社会になった反面、自分さえよければ良いという個人主義の広がりや、家庭や地域における人間関係の基礎を十分に経験できないことから、自分に自信がもてない、人間関係が築けないという人間関係形成能力の低下が表面化してきている。そのことが、子どもたちの問題行動や不登校、学力低下にも結びついている。

このことにより、「小学校学習指導要領解説特別活動編」（以下「解説特別活動編」と略す）では、特別活動がよりよい生活や「人間関係」を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることをより一層明確にするため、目標に新たに「人間関係」を加え、よりよい人間関係を築く力を重視している。さらに、その「解説特別活動編」においては、望ましい人間関係の形成の指導として、社会的スキルを身につけるための活動を効果的に取り入れるよう指摘されている。

本地域における、不登校児童生徒数の推移（平成26年度八重山地区不登校児童生徒数推移）を見ると、小学校、中学校ともに不登校児童生徒は増加傾向にある。特に、適応教室に通級している児童生徒の多くが、友達や先生とうまく付き合えない、集団生活が苦手という、人間関係の問題が要因となり、教室に入れなくなっている。確かに、よりよい人間関係を構築する力の育成が、学校現場における喫緊の課題となっているのである。

これまでの学校現場においても、他者への頼み方や断り方がうまくいかない、意見が言えない、謝れない、すぐけんかになってしまうといった人間関係に問題を抱える児童の実態があった。そこで、互いに関わり合う話し合い活動を重点にした指導を進めてきた。その実際の話し合い活動において、学級をよくしていきたいという児童の意欲的な姿がみられ、相手に思いやりを持つこと等をめあてに学級全体で活動が進められた。確かに、意欲が持続せず、活動の深まりはすぐには表れなかった。しかし、集団にうまく適応できない数名の児童に個別に教育相談を行ったところ、「みんなが自分の事を理解してくれない」「どうして仲良くできないのか自分でも分からない」という悩みを抱えていることが分かった。さらに、同じような悩みを持つ児童や特別な支援を要する児童が学級に在籍していることから、よりよい人間関係を育むために社会性の基礎を身につける具体的な指導が必要であると考えられる。

そこで、学級・学校の人間関係を築くために、自主的、実践的に関わり合い、ルールやマナー等の社会性の基礎を身につける機会を学年ごとの指導段階に意図的に盛り込んでいくことが必要である。特に、高学年になると自律心が芽生え、対人感情が複雑になるため、低学年から段階的に社会性の基礎を育成していくことが重要である。

以上のことから、本研究では、学級活動に社会性の基礎を身につけるためのトレーニングを効果的に取り入れ、よりよい人間関係を築こうとする態度を目指していきたい。特に、学校生活上に必要とされる社会性の基礎を身につけることにより、学級、学校集団がよりよくなろうとする意識の高まりにつながり、よりよい人間関係を築こうとする態度が育まれていくと考える。

〈研究仮説〉

日常生活や学習への適応を学ぶ学級活動において、社会性の基礎を身につける活動を取り入れることにより、児童一人一人に社会性の基礎が身につき、お互いを認め合い、よりよい人間関係を築こうとする態度が育まれるであろう。

II 研究内容

1 学級に必要なよりよい人間関係

(1) 児童の学びを支えるよりよい人間関係

児童が学校を楽しんでいると感じる時とは、解けなかった問題が解けるようになった時であり、自分の考えた事を発表したくさんの拍手をもらった時、仲間と力を合わせて勝利を得た時、新しい仲間ができたり、仲間とわかり合えたりした時である。このような学校生活の日常体験からは、その児童の努力と、仲間や周りの人との良好な関係が垣間見えてくる。良好な関係とは、仲間と共感し、励まし、認め合える関係である。その良好な関係こそが、今、学校ではもちろん社会でも求められているよりよい人間関係なのである。また、これまで当たり前のようになされてきた人間関係づくりは、現在の児童にとっては、新しい学びの側面をもっている。ソーシャルスキルと人間関係の在り方を研究している相川充（1999）によると「生き生きと毎日を送る子どもは、良好な人間関係を形成し、それを維持していくために必要な知識をもっている」と、人間関係が児童の生活に大きな役割を与えていることを述べている。さらに、学級集団の帰属意識の重要性を唱える河村茂雄（2007）も、「意欲的に学校・学級生活を送っている子どもたちには、良好な人間関係がみられる」と述べている。つまり、よりよい人間関係を築こうとする態度は学習意欲の高まりや生活態度の改善を支えている

と言えるのである。

(2) 学級で身につけさせたい態度

学級におけるよりよい人間関係とは、仲間と共感し、励まし、認め合える関係である。しかし、この関係を築いていくためには、気持ちや行動、すなわち態度が備わっていなければならない。例えば、友だちと仲よくするためには、相手の事をお互いが理解し合う、相手を理解し合うためには相手の話をきちんと聞き認めるという態度が必要である。「相手の話をきちんと聞く」ことで聞いてくれる相手は、認められているという安心感から相手への信頼感を持つ。また、「お互いが学級のきまりを守る」ことでみんなが

過ごしやすい居心地の良い環境が生まれ、温かい人間関係が生まれる。このような態度が人間関係を築こうとする態度である。この態度がしっかりと集団で培われていくことにより、よりよい人間関係が築かれる。学習指導要領では、これらの態度を「社会性の基礎」とし、「学級や学校の生活づくりのために自己の役割や責任を果たす態度、多様な他者と互いのよさを認め合って協力する態度、規律を守る態度、人権を尊重する態度」で示しこれらを育成していくこととしている（図1）。

本研究では、学校において社会性の基礎を学ぶ初期の段階である、低学年へ焦点を当てる。

(3) 低学年における社会性の基礎と重要性

低学年における人間関係は、教師が意図的に学級集団の中で、仲よく助け合い楽しい学級生活ができるような体験を通して育まれる。その際、小グループ、学級、学年、他学年と、徐々に幅広い人間関係の中で活動ができるようにすることが望まれる。しかし、幼児期の自己中心性が残っている低学年では、感情的、衝動的な言動が多く、小1プロブレムといわれる集団生活にうまく慣れない状況や、授業が成立しにくい状況が生まれることもある。

そこで、解説特別活動編では、社会性の基礎を指導するに当たっては、「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築くことへの関心・意欲を高め、諸問題の解決に向けて思考・判断を深めるとともに、実践を通して集団生活を行うのに必要な知識や技能を身に付けるよう、学級や学校の集団の育成上の課題や発達の段階に応じた課題に即して適切に指導していく。」と低学年から高学年への見通しを持った指導が示されているのである。

これらを踏まえ、発達段階に即して人と関わる基本的な態度を育成する観点から、低学年における社会性の基礎を、日常的な「きまりを守る」「話を聞く」「謝る」「あいさつをする」「友だちを認める」「助け合う」等と具体的に位置付け、学級で仲よく助け合うという学級活動の目標に向けて授業改善を図っていきたい。

2 社会性の基礎を身につけるための活動

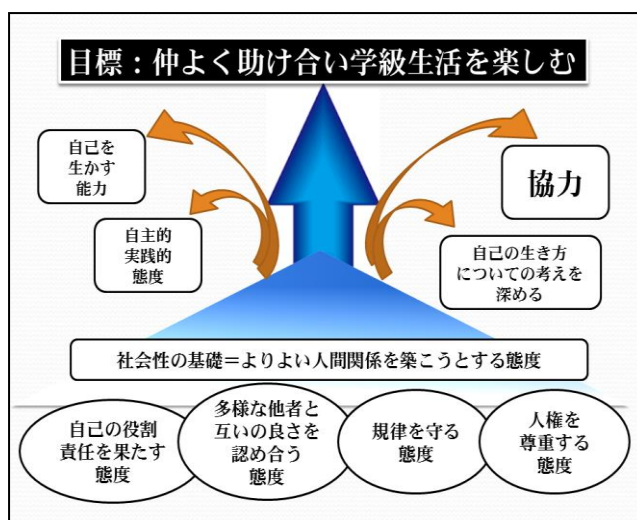


図1 学習指導要領が示す社会性の基礎のイメージ

(1) 実践から考える指導

これまでの実践の中で効果的であったものは、目に見えないものを絵や具体物に表してから練習し実践していくという指導であった。気をつけの姿勢を指導する際に、「しっかり気をつけをしますよ。」という声かけよりも、「合図の後にハイと返事をしながら足はかかとをそろえます。手の位置は横。ズボンの縫い目に中指をピタリと沿わし、背筋を伸ばし、おへそを先生に向けます。」というように、より具体的な指導をするのである。これにより、ほとんどの児童がうまくできるようになる。さらに、実際に児童同士で練習をさせ、お互いに確認し合ったり、意見を述べ合ったりする活動を行うことで、気をつけの姿勢の大切さに気づき、身についていった。そのようにして、児童は自信を持ち他の場面でも行動できるようになった。

このように、児童に身につけさせたい社会性の基礎は、言葉による指導だけではなく、その意義を理解させ、具体的な指導と主体的な体験をさせることで、段階的に身につけていくのではないかと考えられる。また、これらの実践は、「社会性は性格や気質ではなく、人間関係に関する具体的な知識と技術やコツを学び経験させることが必要である」としている相川のソーシャルスキル教育の視点と合致している。本研究では、相川の述べる学びを、児童が自分でみつけていく中で学ぶ学びとして研究を進める。

(2) 社会性の基礎を育むための活動

これまでの実践を踏まえ、社会性の基礎を身につけるために4つの基本的な活動を設定した。基本的な活動とは、「つかむ」「きづく」「やってみる」「ふりかえる」の活動である(図2)。

「つかむ」活動は、活動の意義を児童に理解させる活動。児童の実態に応じ、特に低学年には、言葉だけの指導ではなく、絵や具体物が必要になる。意義を理解させる活動が児童に伝わらなければ、何のためにその活動をしているのか、どのように行動や考えを改善していかなければならないのか、その後に続く活動につながらない。そのため、「つかむ」活動は重要になると考える。

「きづく」活動は、基礎の大切さに気づく活動。具体的なモデルを示し、そのモデルを見て児童が社会性の基礎の大切さに気づいていく。ここでは、児童が一人の意見だけでなく、多くの意見の中から考え、気づいていける雰囲気づくりが必要になる。特に、意見を聞き合うことが、仲間との交流を深め、互いのよさを認め合う態度を養うからである。

「やってみる」活動は行動を練習する活動。理解した意義をもとに、児童自らが気づき改善した行動を練習させる。お互いで話し合い、練習することで、新たな気づき生まれる。何より、自分の行動への自信は、社会性の基礎となる。

「ふりかえる」活動は、学習した社会性の基礎が実践へとつながるよう意欲付けを行う活動である。今後の目標を立てたり、学習内容が継続できるよう、身につけた社会性の基礎が視覚的に確認できる掲示の工夫をしたりしていく必要がある。

これらの基本的な活動を、題材の内容に合わせて活動順番を入れ替えたり、繰り返したりすることで社会性の基礎を身につけることができると考える。

(3) 学級全体で取り組むことの大切さ

学級の中には、社会性の基礎が学年の発達段階にあって十分に身につけている児童もいる。もちろん、その児童にとっても社会性の基礎を育むための活動は意味のある学習である。例えば「きづく」活動を振り返ってみると、教師ではなくそのような学級の児童が「グッドモデル」となり、その自信からその児童は他の児童に教えようとするのである。また、他の児童も自分も「グッドモデル」になりたいという気持ちが芽生え、学級により効果をもたらす。さらに、学級全体で行うことで、お手本が明確になり、お互いでの声かけがしやすくなる。

また、CSS (Classroom Social Skills 以下 CSS) を研究する河村は、「学級でスキルトレーニング

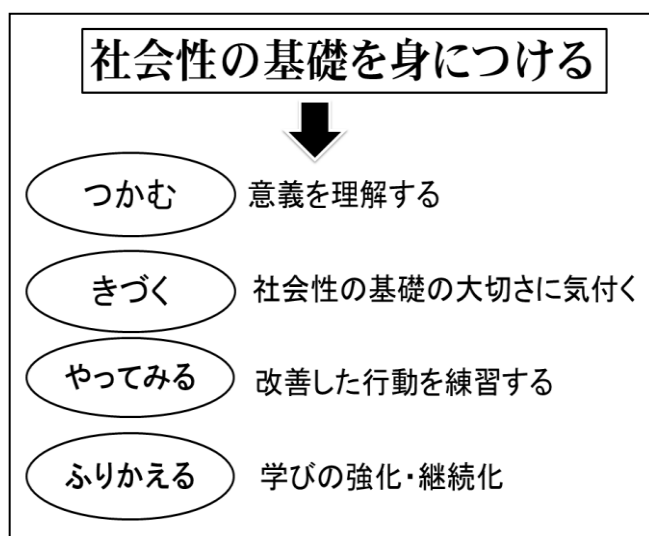


図2 基本となる4つの活動

グを行う場合、他人の行動を評価する規準が共有され、互いの誤解が減り、対人関係のトラブルがとてま少なくなってくる」と述べている。このことから、やはり、社会性の基礎を身につける活動は、学級全体で取り組むことが大切だと考えられる。

(4) 社会性の基礎と CSS のスキル項目の必要性

この学級で行うスキルトレーニングである CSS のスキル項目は、社会性の基礎を身につける活動の尺度や達成度を考える上でおおいに参考になる。その態度は、学校生活における適応や対人関係を営むための具体的な方法やコツなどを取り入れている CSS のスキルの項目と重なる部分がある。CSS は、大きく「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」の領域に分けられている。「配慮のスキル」とは、対人関係における最低限のマナーやルールであり、低学年における社会性の基礎は、この「配慮のスキル」に分類される。この配慮のスキルの項目は社会性の基礎を身につける活動の段階と重なるため、本研究では、CSS のスキル項目を取り入れて授業展開を図っていく。

「かかわりのスキル」とは、話合いに意欲的に参加する姿勢や、自分から友だちを遊びに誘う行動、感情の表出と言える。一方、この「かかわりのスキル」は、社会性の基礎すなわち「配慮のスキル」を身につけることを前提として発揮される。そのため、「配慮のスキル」を重点的に行う低学年では、学年後半で増えていく取り組みとなってくる。これらのスキルを相互に関連させつつ、以前に学習したスキルが積み重ねられるようにしていく。

(5) 学級の実態把握

学級活動で CSS を取り入れるには、まず、学級の子どもたちが、「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」をどの程度実行できているかを把握し、これから身につけさせたいスキルの目標を立てていかなければならない。そのために、社会性の基礎を身につけるスキルの測定を行う必要がある。測定を行うことで、スキルのどの領域が、どの程度できているかが明らかになり、ソーシャルスキルの指導や訓練の後で有効性を確認することもできるからである。

ソーシャルスキルの測定に、河村が開発した「hyper-QU」を活用し、児童の実態を把握していく。「hyper-QU」は、アンケート形式で、「学校生活意欲尺度」「学級満足度尺度」「ソーシャルスキル尺度」の構成からなり、集団形成に必要な対人関係を営むためのスキルが、児童にどの程度身についているかという視点を含めた、より多面的な情報が得られる。さらに、学級担任による児童の実態アンケートを行い、児童の日常の言動や行動を段階的に把握し客観的に評価していく。

(6) 個別支援の必要性

授業で一斉指導を行う場合、一定の授業内容を十分に理解できない児童が現れる。その際に、個別に支援を行い、理解させていく手立てが必要になってくる。社会性の基礎を身につけるための活動においても同様である。児童が孤立したり、学級不適応になったりしないように、教師との二者関係の中で心情面を支える個人への支援は欠くことはできない。教師はその児童が他の児童たちと関われるように仲立ちをしたり、席順や班づくりなどの環境を整えたり、他の児童と関われるようになるための場を授業や学級活動に盛り込んだりする必要がある。また、児童が、実際に他の児童たちと関われるようになるために、行動の仕方を身につけさせる。このように、学級全体の活動においては、なおさら個別支援の必要性を十分に認識して指導に当たる必要がある。

Ⅲ 指導の実際

本研究では、学校生活体験の少ない低学年児童に、みんなで仲よく楽しく過ごせるようにするためにはどうすればよいのか考え、体験させながら活動を進めていく。集団生活の基礎を学ぶ時期の児童に、社会性の基礎を身につける活動を行うことで、自他を理解し合い、学級集団をよくしていこうとする態度を育成していきたい。

1 指導事例（対象 1・2 学年 複式学級）

(1) 題材名 なかよしいっぱいたのしいな

(2) 題材の目標 (1 学期 基礎的な集団づくり)

学級生活を楽しむために、日常の生活や学習の課題について知り、基本的な生活や学習の仕方を考え、実践することができる。

(3) 1 学期の評価規準 学級活動 (2)

観 点	集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活への 知識・理解
イ基本的 生活習慣 の形成	学校や学級のきまりを知り、気持ちよく生活しようとしている。	言葉や行動に気をつけて気持ちよく生活しようとしている。	きまりを守り、規則正しい生活をする ことの良さを理解している。
ウ 望ましい 人間関係	学校・学級集団の中で、様々な人と仲よくできる人間関係を築こうとしている。	友だちの良さを認め、よりよい人間関係を築くためにはどうしたらよいのか考え、行動している。	仲よく温かい学級集団にするための方法を理解している。

2 1学期の指導計画（イ基本的な習慣の形成 ウ望ましい人間関係の形成）

回	検証 授業	◆活動内容 ○ねらい	スキルの領域 スキル項目	共通 事項	目指す児童の姿	評 価 方 法 (学 習 記 録)	事後指導の内容	事後指導で目指す 児童の姿
1	4月28日 (金) 5校時	◆しずかにちゅうもく！ ○教師の合図を知り、注目し、 次の指示を待つことができる。 ※hyper-QU実施	配 慮 きまりを守る	イ	【関心・意欲・態度】 教師のまねをして、静かに 注目する姿勢をしよう としている。	・観察	注目の合図を絵に表し常 に視覚的に意識付けがで きるようにする。	【関心・意欲・態度】 教師のまねをして、静かに 注目する姿勢をしよう としている。
2	5月15日 (金) 5校時	◆きもちのよいあいさつ ○自分も相手も気持ちよくなる あいさつができる。	配 慮 あいさつ をする	イ	【思考・判断・実践】 気持ちの良いあいさつの 仕方を考えようとしてい る。	・振り返りカード ・観察 (あいさつの木カード)	「あいさつ」の3つのポイ ントを意識しながら「あい さつ」が出来たら「あいさ つの木」カードに果物シ ールを貼り、意欲を高め させる。	【思考・判断・実践】 気持ちの良いあいさつの 仕方を考えあいさつを することができる。
3	5月22日 (金) 5校時	◆めざせ！ききキング ○正しい話の聴き方を知り、これ からの生活で実践しようとする 気持ちを持つことができる。	配 慮 話を聞く	イ	【知識・理解】 話を聴く意義を理解し、 これからの生活でも継続 していくことの大切さが 分かる。	・振り返りカード ・観察 (ききキングカード)	達成できたら月ごとの振 り返りカードに冠シール を貼り、意欲を高めさせ る。意識の継続化を図 る。また、コメント欄を 設け児童の努力を認め 励ます。	【知識・理解】 話を聴く意義を理解し、 これからの生活でも継続 していくことの大切さが 分かる。
4	6月1日 (月) 5校時	◆へんしん！たいいくマン ○着替えをする意味を知り、服の たたみ方やしまい方ができる。	配 慮 きまりを守る	イ	【思考・判断・実践】 体育後の着替えをする事 や、ていねいな服のたた み方・しまい方ができる。	・振り返りカード ・観察 (たいいくマンカード)	達成シールで意欲を高め る。 成功したたたみ方の写真 を掲示随時確認できる ようにする。	【思考・判断・実践】 体育後の着替えをする事 や、ていねいな服のたた み方・しまい方ができる。
5	6月8日 (月) 5校時	◆どんなきもちかな ○相手の気持ちを想像し、友だち へ働きかけることができる。	配 慮 助け合う	ウ	【思考・判断・実践】 うれしい時、悲しい時は どんな顔になるのかを考 え、相手の表情から心の 声を想像している。	・振り返りカード ・観察 (心の声カード)	朝の会や帰りの会で、実 践しよう、または実践出 来ている児童の頑張りを 全員で認める。	【思考・判断・実践】 うれしい時、悲しい時は どんな顔になるのかを考 え、相手の表情から心の 声を想像し、友だちへの 声かけができる。
6	6月15日 (月) 5校時	◆きちんとあやまろう ○どんな時にどのように謝るのか を知り、これからの生活で実践 しようとする気持ちを持つこと ができる。	配 慮 謝 る	ウ	【思考・判断・実践】 日常に起こり得る言動か ら、相手を傷つけている ことを知り、どのような 謝り方が良いのか考え、 行動を改めようとしてい る。	・振り返りカード ・観察 (謝り方ポスター)	謝るポイントや謝る際 の様々な言葉を掲示し、実 践のヒントになるように する。 朝の会や帰りの会で、実 践しよう、または実践出 来ている児童の頑張りを 全員で認める。	【思考・判断・実践】 日常に起こり得る言動か ら、相手を傷つけている ことを知り、どのような 謝り方が良いのか考え、 行動を改めようとしてい る。
7	6月25日 (木) 5校時	◆いーれて！いーよ！ ○遊びに入れて欲しい時、どのよ うな言葉と態度にすると、相手に 気持ちがよく伝わるかを理解する ことができる。	かわり 友だちを 認める	ウ	【思考・判断・実践】 相手に気持ちがよく伝わ るよう、遊びに入れて欲 しい時の言葉と態度を考 えている。	・振り返りカード ・観察	仲間づくりゲームやクマ とあなぐらゲームを学校 生活に取り入れ、仲間の 入り方の練習をする。	【思考・判断・実践】 相手に気持ちがよく伝わ るよう、遊びに入れて欲 しい時の言葉と態度を考 えている。
8	7月3日 (金) 5校時	◆ふわふわことばとちくちく ことば ○温かい言葉のよさに気づき優 しい言葉かけができるようする。	配 慮 助け合う	ウ	【思考・判断・実践】 言葉によって気持ちが変 わることを知り、相手を 傷つけない言葉をたくさ ん使おうとしている。	・振り返りカード ・観察 (ふわふわ貯金箱)	温かい言葉かけが使え たら、言葉の貯金をさせ、 意欲を高める。	【思考・判断・実践】 言葉によって気持ちが変 わることを知り、相手を 傷つけない言葉をたくさ ん使っている。

(1) 事例Ⅰ 平成27年6月15日実施

題材名	きちんとあやまろう（ウツましい人間関係の形成）	ねらい	どの場面でもどのように謝るのかを知り、これからの生活で実践しようとする態度を育てる。
評価 規準	目指す児童の姿		事後指導で目指す評価
	日常で起こり得る言動から相手を傷つけていることを知り、どのような謝り方が良いのか考え、行動を改めようとしている。 【思考・判断・実践】		日常で起こり得る言動から相手を傷つけていることを知り、どのような謝り方が良いのか考え、行動を改めようとしている。 【思考・判断・実践】
過程	児童の活動	指導上の留意点	資 料
導入 10分	1 学習内容を知る。 【きづく】 2 物語を聴き、謝ることの大切さを知る。	・学習の流れを分かりやすく掲示物で説明し、身につけて欲しい内容を伝える。 ・児童が興味を持てるよう人物カードを活用する。 ・児童の日常に起こり得る出来事を、物語に取り上げる。	デジタル教材 人物カード 学習の流れボード 
展 開 25分	【つかむ】 3 物語に登場する物語の誤り方を予想しながら、どのような誤り方が良いのか考える。 【やってみる】 4 良い謝り方の練習をする。 【つかむ】 5 知らないうちに友だちを傷つける場面を理解する。	・児童の予想した謝り方を教師が演じ、どの点が相手に気持ち伝わるか、改善点や工夫する点について話し合う。 ・良い謝り方を確認させてから練習に入る。 ・1対1が苦手な児童のために、教師対全員で行ってから1対1の練習に入る。 すぐに あやまる  めをみて きこえる ように あやまる はじめに あやまる 	行動カード 
終 末 10分	【ふりかえる】 6 振り返りカードで学習のまとめをする。 7 頑張った態度についてを知り、今後の生活に生かすことで楽しい生活が送れることを確認する。	・謝り方のポイントを振り返らせる学習カードにする。 ・学級掲示カードで意欲を高めさせる。（キグカード）	学習カード・シール
事後 指導	・朝の会や帰りの会で実践している児童、実践しようとしている児童の姿を取り上げ全員で認め合う。 ・できているカードを活用し、意識の継続を図る。		

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

題材名	ふわふわことばちくちくことば (ウ望ましい人間関係の形成)	ねらい 言葉によって気持ちが変わることを知り、これからの学校生活で相手を傷つけない言葉をつかうことができる。
評価標準	目指す児童の姿 言葉によって気持ちが変わることを知り、相手を傷つけない言葉をたくさん使おうとしている。 【思考・判断・実践】	事後指導で目指す評価 言葉によって気持ちが変わることを知り、相手を傷つけない言葉をたくさん使っている。 【思考・判断・実践】
過程	児童の活動	指導上の留意点 資 料
導入 10分	【きづく】 1 絵本の読み聞かせから、言葉により相手を傷つけることを知る。 2 今日の学習について確認する。	・絵本の内容が読み取りやすいよう、挿絵の配置を工夫する。 ・主人公が相手を傷つけていることに児童が気づくよう、その場面を強調して読み聞かせする。 絵本「あんなになかよしだったのに・・・」
展開 25分	【つかむ】 4 言葉には「ふわふわ言葉」「ちくちく言葉」があることを知る。 【やってみる】 5 役割演技をし、言葉の違いで気持ちの受け止め方が違うことを感じる。 【きづく】 6 ふわふわ言葉が気持ちを温かくすることを確認し、言葉により元気になった実話を聴く。(DVD)	・友だちが「遊ばない」と言った理由に相手が傷つく言葉を使ったことをおさえさせる。 ・これまでの経験を振り返らせ、言葉を出し合い、分けていく。 ・ちくちく言葉で心が傷つくことを心の風船で捉えさせる。 ・ふわふわ言葉ちくちく言葉の両方を言い合いその時の気持ちの聞き合いをさせる。 風船カード
終末 10分	【ふりかえる】 7 振り返りカードで学習のまとめをする。	
事後指導	・朝の会や帰りの会で実践している児童、実践しようとしている児童の姿を取り上げ全員で認め合う。 ・児童が自然に言葉をふやせるようふわふわ言葉を掲示する。 ・授業後も相手を傷つく言葉が見られる児童への声かけを個別に行う。	

4 仮説の検証

よりよい人間関係を築こうとする態度が育まれているかどうか検証するために、まずはアンケートや児童の観察を通し実態把握をする。次に、個々の社会性を高め、お互いの言動を理解し合えるよう社会性の基礎を身につける活動を検証する。そして、児童の様子やワークシート、事後の学級掲示、授業実施前後のアンケート調査より仮説の検証を行う。

(1) 社会性の基礎を身につける活動は有効な手立てとなったか

① 学級で身につけさせたい態度の把握

学級におけるよりよい人間関係とは、互いが理解し合うことである。そのために必要な態度が児童にどの程度身につけているのか、事前アンケートや「hyper-QU」、児童の様子から把握する。

授業1回目の顔合わせで、事前アンケートを行いながら児童の様子を観察した。そこで見られた課題となる態度が、「話の聞き方」や「授業の受け方」「学校での過ごし方」等、集団生活のきまりや、話す・聞く等の基本的な態度であった。さらに、児童の休み時間の身の回りの様子からも次の準備や、机を整理する等の態度が身につけていないという課題がみられた。基本的な態度が身につけていない児童は、周りからの注意をよく受けることがある。その児童にとって注意は悪口として捉えられてしまい、人間関係づくりに大きな支障をきたしていることが見てきた。

アンケートの結果から本学級では、学級集団に満足している児童は、自己評価が高い事に対し、不満足群に属する児童は自己評価が低いことが分かった(図3)。

しかし、担任による児童の行動評価は、不満足群に属する児童より、満足群に属する児童の方に課題があるというズレが見られた。そこで、不満足群の児童に学級で困っている事を訪ねると、授業を妨げる言動や、友だちとのトラブルが挙げられた(図4)。このことから、低学年児童期にみられる自己中心的な態度や、集団生活のきまり等の理解が未熟であることが原因で、お互いが理解し合えず、人間関係に課題が生じていた事が明らかになった。

この結果から、学習指導要領が示す、社会性の基礎を育てることの重要性が分かるとともに、本学級で身につけさせたい態度を「きまりを守る」「あいさつをする」「話を聞く」「謝る」「友だちを認める」「助け合う」に重点を置き授業を図ることができた。

② 社会性の基礎を育むための活動

「つかむ」活動では、なぜ学ぶのか児童に日常起こり得る場面を想定し、その意義を理解させる。児童は、社会性の基礎の大切さをなんとなく理解しているようであったが、意義を知ることによって納得し、これまでの自分の行動を振り返っていた。着替える意義を低学年児童に理解しやすいよう、イラストを活用しながら意義を伝える指導では、意義を理解した児童が、授業後、体育着での登校が減り着替えを進んで行うようになった。また、この後に行った服のたたみ方も実践するようになり教室に服や靴下が散乱するような事がなくなった。

「きづく」活動では、絵本の登場人物や学級の仲間の写真等を活用して、グッドモデルとバッドモデルを見せ児童の意見をもとに行動を考えさせた。

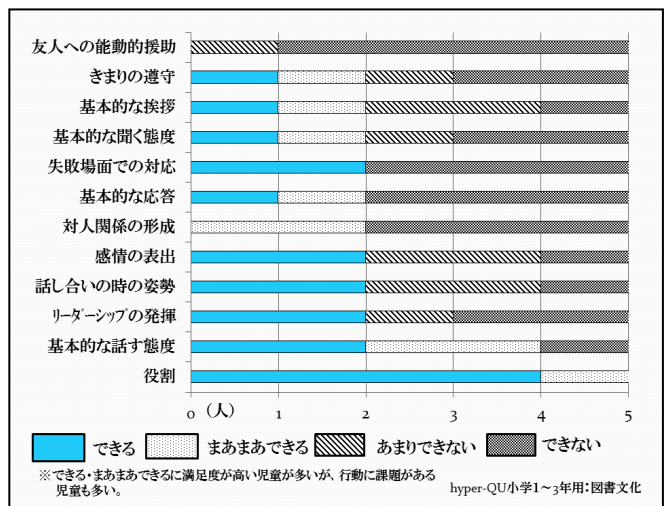


図3 ソーシャルスキルの結果と学級満足児童の実態

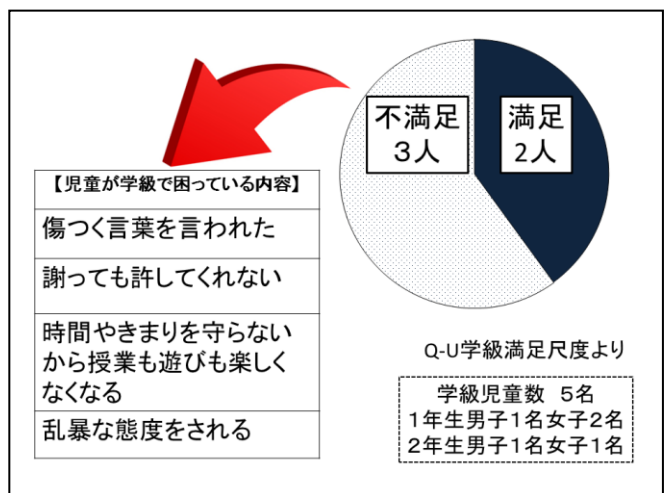


図4 不満足群児童の実態

失敗場面での対応を学ぶ授業では、ペーパサートの登場人物の反応から、どのような謝り方が良いのか児童に考えさせた。そこで、「失敗したら何度も謝れば良い」という児童の意見に対し指導者が「ごめんね」を連発して演じた。するとその態度に、「気持ちがない」、「ふざけているみたい」という意見が出、気持ちの良い謝り方を検討し始めた。そこでは、他の人がとった反応や行動に対し、「いやな態度だね」、「その言い方だったらいいね」と、その行動が、どのような結果になるのか考えながら発言する姿があった。このような対話的な活動から社会性の基礎の大切さに気づいていく児童の姿がみてとれる。さらに、友だちの意見から自分の行動を振り返り、改善しようとする発言もみられた（写真1）。

「やってみる」活動では、実際にどのように行動するのか具体的に指導していった。ここでは、うれしい言葉をかけられた時と、うれしくない言葉をかけられた時では、どのように感じるか実際に言いあいっこをさせた（写真2）。これまで相手を傷つける言葉を使っていた児童は、自分が言われるといやな気持ちになるという感覚を両方の言葉を体感する練習で学び、今後、どのような言葉かけをした方が良いのか理解していた。また、きまりを守る授業で行った、静かに注目する際の授業でも、聞き方の視点を話合わせ何度も練習させることで自信を持ち、聞く姿勢に改善がみられた。さらに、身についた態度を、褒められた児童に対し負けずにきまりを守ろうとする態度が現れ、学級全体に広がりが見られた（写真3）。

「ふりかえる」活動では、授業の終末に学習のまとめをし、学んだことをもとに、今後の目標を確認させた。さらに、学級掲示に達成記録を残せるように工夫し、児童の意識の継続化を図った（写真4）。毎時の授業後にシールを配布し、達成した社会性の基礎項目に貼らせていくことで、児童は、達成した学びが視覚的にも確認できるようにした。確かに、始めはシール目的の児童もみられたが、回数を重ねるごとに相手を意識して行動する児童が見られるようになった。このように、活動を振り返らせ各児童の振り返りを肯定的に認め、思い起こさせる指導によって次への意欲を育むことができるといえる。



写真1 きづく活動の様子



写真2 やってみる活動の様子



写真3 改善がみられた聞く態度



写真4 「ふりかえる」活動のための掲示

以上のように、社会性の基礎を身につける活動を取り入れることによって、児童は、改善しなくてはならない意義を理解し、さらに練習を繰り返すことで自信を持つようになってきた。そして、衝動的な言動や自己中心的な考えが減ってきた。そのことは、安心した雰囲気の中で相手の意見を聞き合うことができるようになってきていることを示しており、一連の社会性の基礎を身につける活動は、よりよい人間関係を築こうとする態度を育てる学級活動の有効な手立てであったと言える。

(2) 児童によりよい人間関係を築こうとする態度を育てることができたか

① 事前事後アンケートからの検証

本学級で身につけさせたい社会性の基礎「きまりを守る」「あいさつをする」「話を聞く」「謝る」「認め合う」「助け合う」に対する児童の自己評価を検証授業の前後で比べてみる。低学年では家庭での変容に結びついているかどうか、重要な尺度であり、保護者にも記入してもらった。

「きまりを守る」では、授業を受ける時や、遊びのルール、学校での過ごし方を検証項目とした。なお、検証授業前、きまりがあることは知っているが、実行に移せない児童が、きまりを守ることで自分自身も気持ちよく過ごすことができるという経験の続け、自信が付き全員が継続につなげることができた(図5)。また、1回目の授業では、話を最後まで聞かず、何度も聞き返して行動していた児童もいたが、「話を聞く」授業の後、全員が授業に集中しほぼできるようになった(図6)。

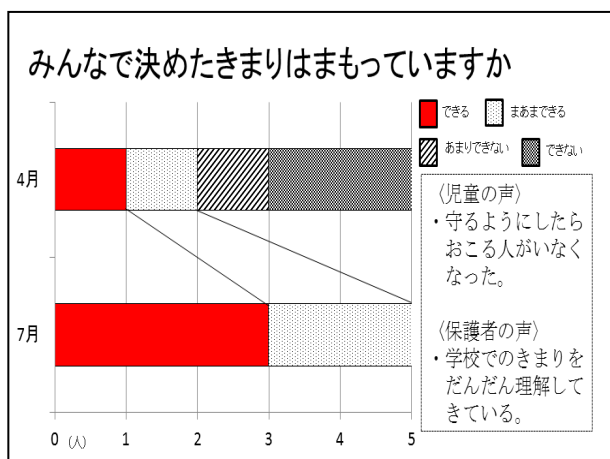


図5 児童の変容(きまりを守る)

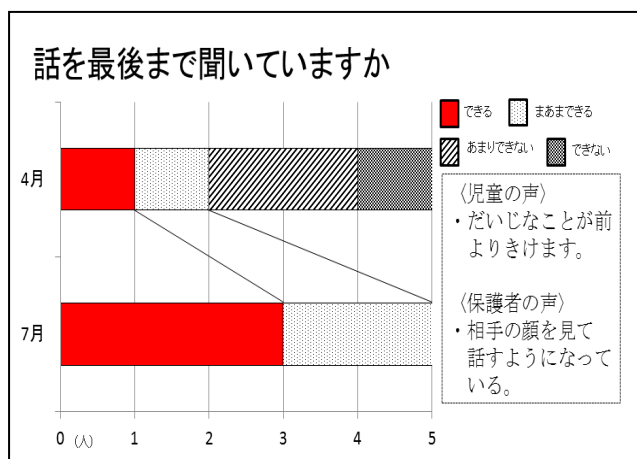


図6 児童の変容(話を聞く)

「謝る」を学ぶ授業を通して、児童は自分の行動を振り返り、相手を傷つけないように謝ることができるようになったと振り返りシートに記入している(図7)。全員が表情だけでは伝わらないことや、自分で意識していなかった行動が相手を傷つけていることも理解できるようになり、失敗したときすぐに謝ることができる(図8)。確かに、心の中で深く謝っていても、実際の謝り方ではうまく相手に伝わっていないことや、自分が思っている以上に相手は傷ついていることを理解し、教室でのトラブルは減少してきている。また、他学年との交流の場でも学習したことを実践する姿がみられるようになってきた。

「できてイルカ? あやまりかた」

① たいだい あやまりかたを 書きましょう。

① 目を見てきこえるようにあやまる。
② すぐにあやまる。
③ まじめにあやまる。

② どんな ときに ひとを いやな きぶん に しているか わかりましたか? ○をしましょう。

わかった すこしわかった わからなかった

③ これから しっかり あやまろうと おもいますか? ○をしましょう。

とてもおもう すこしおもう おもわない

図7 振り返りシート

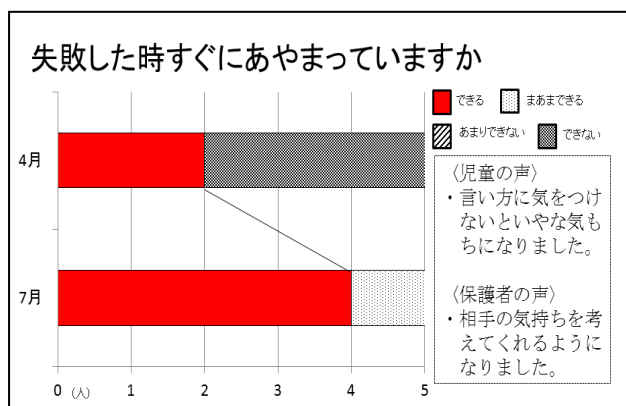


図8 児童の変容(謝る)

「あいさつをする」では、4人の児童が自信を持ち「できる」と答えられるようになった。「あいさつをすると教室が明るくなる」「人と話がしやすくなる」「笑顔になる」という感想から、あいさつの気持ちよさを感じるようになってきた様子が見える。また、あいさつをする声の大きさの大切に気づいて、改善する児童もみられた（図9）。

「友だちを認める」では、自分から進んで友だちを遊びにさそふことができる児童が増えた。これまでは、声をかけるのは、「はずかしい」「相手が来るのを待つ」という気持ちだったが、なかなか言い出せない友だちもいることや、立場を変えて考えることで相手の気持ちを察するようになってきている（図10）。

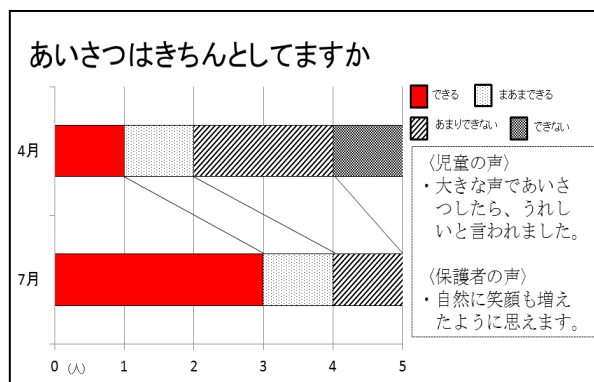


図9 児童の変容（あいさつ）

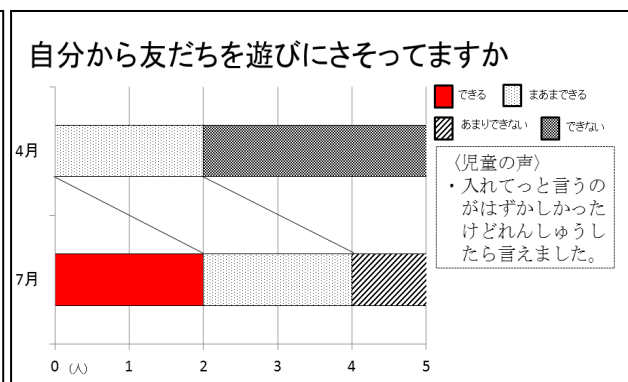


図10 児童の変容（友だちを認める）

「助け合う」では、「誰かが困っていたら自分から手伝いをしますか」という問いで、否定的だった4人がなくなり、友だちを助ける行動を進んで行う児童が増えた（図11）。

さらに、友だちだけでなく授業後は、教師の手伝いをする場面も増え、行動に広がりが見られるようになった。このように、社会性の基礎を身につけることで児童は自信を持ち行動できるようになってきたと言える。実際に、授業に向かう態度が改善され、以前に比べて学級全体が落ち着き、学習に集中するようになってきている。さらに、お互いの意見を聞けるようになるなど譲り合いや認め合う態度がみられるようになった。

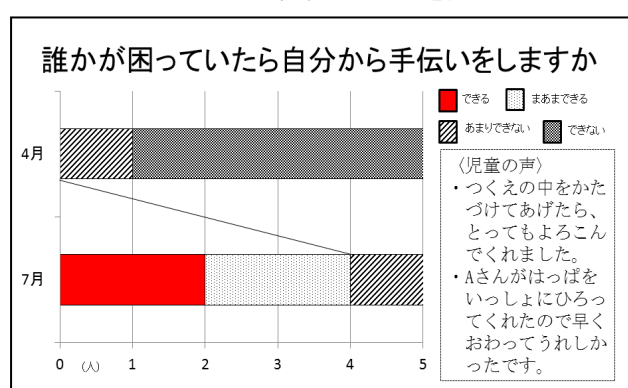


図11 児童の変容（助け合う）

これらの検証結果より、社会性の基礎を身につける活動を取り入れることで、児童一人一人に社会性の基礎が身につく、お互いを認め合い、学級の友だちとよりよい人間関係を築こうとする態度が育まれたと言える。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 学級の社会性の基礎を身につける活動を進めていくことで、低学年児童期にみられる自己中心的な行動が減り、学習態度や学校生活の態度が改善された。
- (2) 個々の社会性の基礎が身についたことで、お互いが認め合うようになり、仲よく助け合う関係が育まれた。
- (3) 学級全体で身についた社会性の基礎を掲示することで、振り返ったり、確認し合ったりして、よりよい人間関係を築こうとする態度を継続させることができた。

2 課題

- (1) 人間関係づくりに関する課題を教師主導で解決させる指導から、発達の段階に即し児童が自主的に実践的に解決していける学習活動につなげていく必要がある。
- (2) 人間関係を形成していく上で必要な上級生、下級生の関わらせ方を少人数、複式学級でどのようにして改善していくかが課題である。

〈主な参考文献〉

- 国立教育政策研究所 2015 『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』 文溪堂
- 岩澤一美 2014 『クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法』 ナツメ社
- 菊池省三 2012 『菊池省三の話し合い指導術』 小学館
- 橋本創一・細川かおり・栗原治子・渡邊貴裕・原田智恵子・尾高邦生 2011 『小1プロブレム・予防&改善プログラム』
ラピュータ
- 相川充・猪刈恵美子 2011 『イラスト版子どものソーシャルスキル友だち関係に勇気と自信がつく42のメソッド』
合同出版
- 杉田洋 2009 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館
- 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫 2007 『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル小学校低学年』 図書文化
- 國分康孝・清水井一 2007 『社会性を育てるスキル教育 35時間小学1年生』 図書文化
- 國分康孝・小林正幸・相川充 1999 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校』 図書文化
- 河村茂雄 『hyper-QU よりよい学校生活と友だちづくりのためのアンケート小学校用 1～3年』 図書文化